

牧師室から (2023.8.6)

今年西暦 2023 年は、バッハがライプツィヒに移って来てから 300 年ということで、バッハ愛好家のみならず、音楽や教会関係では催しが所々ある。

バッハは前任地のケーテンでは、領主が改革派（カルヴァン派）であったため、礼拝においては、ポリフォニックな所謂凝った曲を使うことができなかった。しかしその分礼拝以外で、世俗曲というような形式で埋め合わせをしていたようである。彼がライプツィヒに呼ばれた際には、そこはルター派であったので、彼は礼拝において毎主日のためにカンタータを作り、礼拝でささげた。またこの時期にはマタイ受難曲やライプツィヒコラールなど、教会においてもとても重要な宗教曲を多く書いている。

彼の生涯を振り返ってみれば、人生の後半にライプツィヒに来て主に宗教曲を書いたことや、またケーテンのようなところに導かれて、礼拝においては十分に本領を発揮できなかったが、その代わりに自由な世俗曲を多く書いたというのも、主の奇しき導きであったと思う。勿論他の町にも彼は滞在していたが、それぞれの地域における人や先達の音楽との出会いによって、キリスト教会のみならず、一般の人の魂をも深く動かす名曲が作られていったのである。それはバッハが単に宗教音楽家であるだけでなく、もっと広い意味での「音楽の父」としてのタレントがあり、それが彼の人生遍歴によって開花されていったのであるといえるのではないか。

とにかく、彼が人生の後半、晩年から死に至るまでライプツィヒで過ごしたことというのは大きな意味があった。そこで今回はライプツィヒについて少しお話ししようと思う。

(鈴木淳一牧師)